NIE

年　組　名前

道新でワークシート

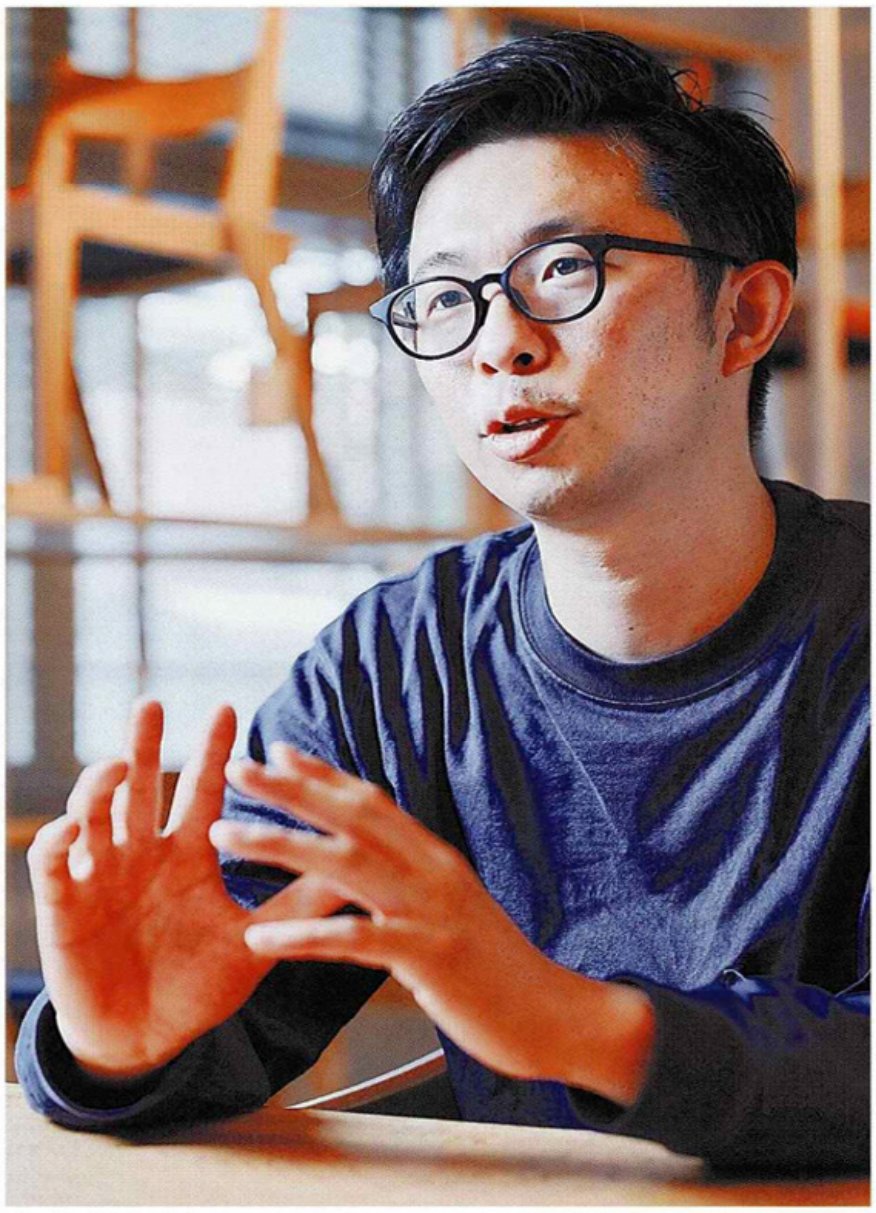
津別・山上木工
山上裕一朗専務に聞く

山上木工が製作したメダルケース

【津別】東京五輪が23日開幕する。選手に贈られる木製メダルケースを製作した津別町の家具メーカー、山上木工の山上裕一朗専務(37)に、新型コロナウイルス感染拡大による延期を経て開催を迎える今の気持ちや、手がけた約5400個のケースに込めた思いを聞いた。（阿部誠）

五輪メダルケース　お嫁に出す気持ち

5400個製作「誰が手がけたか 思ってくれたらうれしい」



東京五輪のメダルケースに込めた思いを語る山上裕一朗さん（高橋義英撮影）

――いよいよ東京五輪が開幕します。

「ケースの受注が決まったのが2018年秋。長かったですね。19年12月ごろから20年7月の大会組織委員会への納品まで、徹夜か、眠れても3時間睡眠の日が多く、日常の仕事と並行した作業は大変でした。進捗状況を考えると、何度も『間に合うのだろうか』と重圧に押しつぶされそうになり、1日が1・5倍の36時間あればどんなにいいかと、何度思ったことか」

――昨年3月に開催の1年延期が決まりました。

「ケースの製作を粛々と進めるだけでした。昨年7月の納品を前に心配したのは湿度など東京の気候。当初は全く想定になかった1年間の保管について考えました。搬送前、ケースを48個ずつ入れた段ボール箱に、博物館の収蔵品に使われる防虫シートを入れました。組織委は『最善の環境で保管する』と約束してくれたので安心しました」

A

「人それぞれ考え方があり、いろいろな思いがあることはよく承知しています。どんなに私が思い悩んだところで、どうしようもありません。コロナとは関係なく、作り手として高品質のメダルケースを提供することを自分の使命と考えました。ただ、ケースがなかったことになるのは考えたくなかった」

B

「父の存在です。受注したとき、これは私の仕事で、社長の父に頼らないと決めましたが、甘かった。19年の年末、ケースの塗装で壁に当たり、『おやじ、助けてくれ』と頼むと『自分でやれ』と怒鳴られた。私は泣いていました。でも翌日、父は作業場に来てくれた。思い返すと、材料の調達でも父のつてを頼ったりと、節目節目で助けられていた。まだまだ父を越えられないと痛感しました」

C

「ケースは3位の選手にまで渡るので、全競技です。まだ製作の最中、五輪を観戦に行こうと父を誘ったのですが、『完成させることだけを考えろ』と一喝され、チケットは応募しませんでした。テレビにかじりついて、あらゆる競技を視聴します。全選手にベストを尽くしてほしい」

――選手へのメッセージをお願いします。

「磁石でフタが開閉する機能性や美しいデザインなど、メイド・イン・ジャパンのケースの良さを実感してもらえれば。どこの誰が手がけたかと、思いをはせてくれたら、うれしいです。納品前夜、『あす行ってしまうのか』と、作業場でケースと一緒に寝たのが昨日のことのよう。私に娘はいませんが、選手の元へ、お嫁に出す気持ちですね」

２０２１年７月２３日（金）朝刊　北見・オホーツク面　１３P（記事は一部再編集しています）

①文中の空欄Ａ～Ｃに当てはまる質問を次の選択肢から選んで答えなさい。

ア　大会で注目する競技はありますか。
イ　今になって思い出すことは何ですか。
ウ　コロナ禍での五輪開催をどう考えていますか。

A	B	C